

## ～森づくりで広がる和～

### 福祉施設連携による環境保全・改善活動への取り組み

株式会社 研進 いのちの森づくり担当 川下 都志子

神奈川県平塚市にある「社会福祉法人進和学園」は、「福祉・環境・教育・労働」の連携を目標に「いのちの森づくり」に取り組んでいます。この取り組みは、地球温暖化対策への対応、障害のある方々の「生き甲斐」や「働き甲斐」につながり、今では県内外の福祉施設やNPOとも連携しています。そこで、障害者、健常者を問わず、新たな気付きの場ともなっている進和学園「いのちの森づくり」プロジェクトの取り組みをご紹介します。

#### 共に過ごすことによる、気づき

私は、東北大震災の11日後、2011年3月22日に(株)研進(進和学園の営業窓口会社)に入社しました。当時、施設内は震災の影響を如実に受け、利用者(ハンデをもち施設を利用する方々)は奇声をあげる人、うろうろと立ち着かず徘徊する人など、表現の仕方は個人により異なりますが、東北の方々の苦難を共に苦しんでいる様に思えました。その後、福祉的就労環境を勉強する為に紅茶の封入梱包作業などを行い、利用者の方と共に過ごしました。2か月目には、東北への多額の義援金を東ティモールが提供したことを耳にし、東ティモール産のコーヒーの流通の促進と利用者の工賃を得ること、売り上げの一部に東北防潮林の苗木基金機能を付けるなど、東北と東ティモールと福祉の三方に喜んでもらえる珈琲商品を企画しました。その企画が具現化に向けて動き出した時には、「いいじゃないですか」「凄いですね」と、一番温かく激励応援してくれたのは利用者の皆さんでした。そして、新企画の準備に慌ただしくなる私を気遣ってくれたのも利用者でした。利用者の皆さんから、私の好きな景色を撮影した写真のサプライズプレゼントがあり、余りに温かい心遣いに感動し、言葉を一瞬失いました。時間もお金もかかり、負担をかけてしまったことに「ごめんね。ありがとう」と云うと私だって何かしたいんですよ。東北には行けないけど、支援したいんですよ」と云う言葉に、いつの間にか自分がハンデをもつ方から支援を受けるとは夢にも思わず、本心では一人の人として対等に捉えていなかった心の奥底の歪みに気付かされ、自らを恥じ入りました。

利用者の方々は、素直に仕事を担当できることを喜び、仕事を通じて社会の役に立っていることに生き甲斐、やり甲斐を見出し、日々の支えとされております。障害者だろうと健常者だろうと仕事をする、社会の役に立つことがとても重要であり、大きな意味をもつことを勉強させていただきました。

#### 福祉的就労環境の実態

(株)研進の事務所がある施設は、社会福祉法人進和学園の中の就労支援・継続・移行の事業所で「しんわルネッサンス」と云います。主に知的障害の方を中心にA型(雇

用型)17名、B型(非雇用型)84名、移行(就労支援移行事業)14名の合計115名の方が毎日通い、仕事に従事しています。

支援員である職員の方々は、利用者の健康面の管理から、家庭との連絡や通所時の利用者の安全確保、仕事上の段取りなど、広範囲なサポートを要求され、その仕事量や勤務時間は、大変厳しいものがあります。それでも10年20年と長期の勤続者が多く、身びいきを抜きにしても奉仕の精神と忍耐力を兼ね備えた方々が、開設56年の進和学園の礎となられているのではと思います。

「しんわルネッサンス」は、1970年代から本田技研工業(株)様より、自動車部品の組み立てを受注しており、通所される115名の内、実に75名(65.2%)の方がその組立作業に従事しています。その仕事の質の高さが評価され、品質ISO9001を全国で初めて取得した非常に優秀な施設です。

しかし、福祉的就労環境における全国の平均月額工賃は、1万2千円～3千円と低所得です。一方、進和学園は、自動車部品組立事業を受注しているため、A型月平均約148,000円、B型月平均約46,000円と高い工賃水準を保つことが出来ています。加えて、「いのちの森づくり」プロジェクトのみで計算しても3万円～4万円の月額工賃をキープ出来ており、福祉施設の在り方を導く、リーダー的役割を担った施設でした。

しかし、進和学園の工賃水準を以てしても健常者との溝は大きく、加えて、2008年のリーマンショックや2011年3月東北大震災、2011年8月～12月のタイ大洪水と自動車業界にも苦難が連続し、現地調達・現地生産に経営シフトした自動車部品組立の発注は、全盛期の3分の1と一時期、落ち込みました。必然的に進和学園は、利用者の工賃の安定化の為、1部門に頼った運営を改め、多角化を余儀なくされます。



ご家族連れの方々も参加され、植樹祭が開催された

#### 福祉と環境活動の交流の広がり

事業の多角化を目指し、2006年10月「いのちの森づくり」プロジェクトが発足しました。このプロジェクトは、横浜国大名誉教授 宮脇昭先生の提唱する森林再生の理念が進和学園の理念と酷似していることから、2006年4月に新設した「しんわルネッサンス」の植栽



施設間連携による森づくりチーム「どんぐりブラザーズ」が宮脇昭教授から説明を受、初の植樹リーダーに挑む

を宮脇先生にご指導いただいたことがきっかけとなっています。「仲の良い者だけを集めず、お互いに少し我慢し合うことで成長す

る」という理論が、福祉的就労から一般社会に利用者が混ざった時に精神的にも肉体的にもお互いに少し我慢し合い、成長していく姿と重なり、人間社会も同じではないかと理事長がいたく感動したのです。

現在、このプロジェクトにより、福祉施設連携で育苗する苗木の総本数は、約10万本、扱う樹種は、約80種類弱にもなり、出荷累計本数は、約16万本を突破しました。出荷先は、東北から南は、兵庫県まで広域に亘り、現在も福島県南相馬市の為の出荷準備作業をしています。

私は、「いのちの森づくり」プロジェクトの担当となり、森づくりを通じた社会と福祉の交流の機会が相互にメンタルケア、教育、自然環境の学習へと繋がる場として、素晴らしく価値が高いことに気がきました。その機会は、森づくりのプロセスの中に多くあり、①どんぐり拾い ②どんぐりから芽が出た苗をポットへ移すポット苗づくり ③2～3年生の苗木を植える植樹 ④植樹後、森を育む育樹(主に除草作業) ⑤森の講座などです。

特に植樹祭や育樹では、障害者も健常者も老若男女が自然と混ざり合い、最高の交流の場となります。思い出は、記憶となり企業からも市民活動団体からも又機会をもちたいとお声がかかります。自分の中でも、もしかすると森づくりが福祉的就労環境を改善する起爆剤になるかも知れないと可能性を確信しました。

進和学園のみならず、福祉施設や就労事業所の横の連携を深め、育苗・植樹・育樹と植樹地に近い施設からの協力を仰ぐことで自然に連携の輪が広がりました。現在、神奈川県で6施設、県外を合すると10施設がこの取組みに参加しています。

こうした福祉施設間連携による森づくりチームを「どん

ぐりブラザーズ」と命名しました。昨年11月23日には、テレビ神奈川様との連名主催で「どんぐりブラザーズと植樹大作戦～あすの地球と子どもたち～」1000本植樹祭を開催し、福祉施設が取り組む森づくり事業を紹介する為、利用者の皆さんにステージに上がってもらいました。当日は、100名の募集のつもりが250名の方にご来場いただき企業・NPO・行政・学校と多方面からご評価いただき、又とない交流の場となりました。

#### 森づくりは人づくり

公共の場に森づくりをしたくても予算が付かないというご相談の場合も「進和学園いのちの森づくり友の会」の会員からの善意の寄付金を活用し、植樹祭が開催出来る様にサポートも可能となります。お蔭様で学校や国道沿い・公園などの公共スペースの森づくりを教育機関・行政・市民活動団体からご利用いただき、自然環境の保全・改善活動と同時に福祉的就労環境への工賃還元

に役立っています。

こうして、

外部からご評

価いただいた

森づくりが地

域・社会・教

育・福祉・環

境・労働と広が

ってきたのも「自

分さえ良けれ

ばいい」と云う排他的な考え方ではなく、関わる方、皆

さんに喜んでいただきたいと施設もスタッフも心を砕い

てきた結果だと思います。更に、私達は、森の恩恵により呼吸をし、自然の浄化作用により安全な水を手に入れ、

森のつくった土で耕した食料を頂く、日本の昔からの教

えである「身土不二」を、土に触れる日々の中で学べます。

今、日本が病んでいるのも人が自然の一部でありながら、

不自然なことを強いられ、不自然な環境に身を置き、土

から離れてしまった人々への警告のような気がします。自

然の大切さ、自然と共に生き、足ることを知り、毎日に

感謝することが福祉や一般社会をも網羅して、照葉樹

林文化の復活、日本の再生の鍵になる気がしてならない

のです。

そして、森づくりは、健常者・障害者の垣根を越えた

人づくりの場であると実感しています。地域の中で環境

活動や福祉活動が共に連携して、豊かに取り組まれるこ

とを期待したいと思います。



「いのちの森づくり」の紹介でステージに上がった神奈川県6施設による「どんぐりブラザーズ」